

9) 筋ジス成人療棟におけるグループワーク

国立岩木療養所

佐藤 勇

<はじめに>

入所患者の生活は、身体的にも、環境的にも制限を受けやすい要因を含んでおります。しかし20才以降の年代は、社会に参加し自己の環境を設定していく主体的年代であります。患者に即応する環境づくりをめざして自治会活動を展開しており、そこへ提起された作品展活動を媒介として

- ① 社会的経験を豊かにする。
- ② 話し合いの場に不適応な対象を製作活動面からの適応を試みる。
- ③ 活動を経験するなかで、何かをみいだしていこうとする主体的姿勢を養う。

等をかかげグループワーク的側面より活動の展開を試みたので展開とその結果について報告します。

<活動方法>

〔期間〕 昭和50年9月から51年10月まで。

〔対象〕 19才以上47才未満当療棟患者全員22名。

〔活動内容〕 療養所外（青森市内のデパート）でみずからの活動として作品展を開催する。

作業（作品）内容は、

- ①こぎん・文化刺しゅう・リボンフラワー・クロスステッチ（従来から経験のある手芸）。
- ②七宝焼（講師指導による作品）。
- ③写真展及び文集（筋ジスの生活紹介）。

活動方法は、

- ①現在する成人患者の会を母体とする。
- ②患者の日常活動として行なう。
- ③ボランティア導入を検討する。
- ④日筋協青森県支部との提携を検討する。

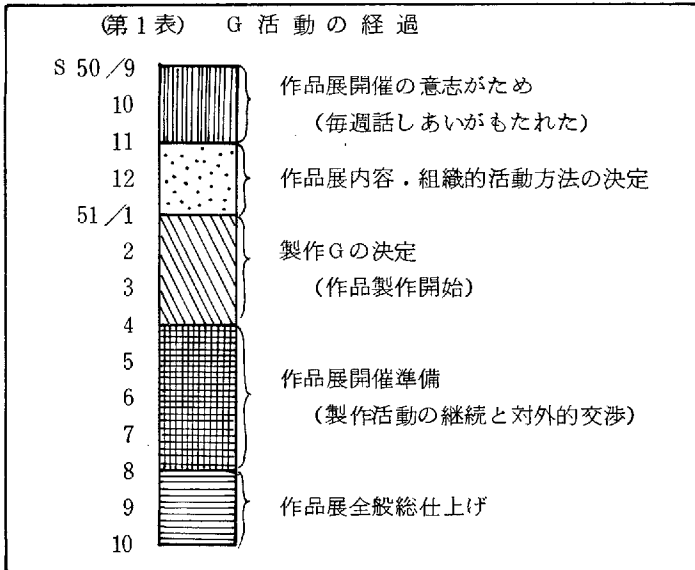
〔児童指導員〕

- ①成人患者の会の相談・援助。
- ②グループ活動についていけない対象者への援助。

<活動展開>

特別な時間割当等はせずグループ（以下Gとする）と個人の自主的な取り組みに心掛けました。

なお、この1年間の活動経過については第1表のようになります。9月より12月末の段階は、患者全員にまでは位置付きにくく自治会のリーダー達が苦勞した段階であり、苦勞より責任感と主体性が芽ばえていった過程でもあります。1月以降、具体的に製作活動が展開されだし全員が一団となって作品展を失敗に終らせたくない成功させようとする雰囲気は築かれていき、組織運営と製作活動の歯車が良くかみ合っていました。



< 結 果 >

作品展終了後、アンケートを中心とした個別面接の実施と以後の行動観察より目標にかかげた項目について以下のような結果を得ました。第1項目については、特に自治会幹部と当日の受付係・見学者への説明係を体験した対象に効果をあげることができました。

第2項目は、製作活動を中心に自分のグループをより良いものにするべく努力が続けられ、また、今後も作品展を開催していくことを期待していることからその効果をとらえることができました。

第3項目については、G内で高評を得た対象を中心に、継続的な製作活動の展開が観察されました。また、その反面長期間計画的に展開される活動は、医療の場に即応しないのではないかとする批判が療棟職員のなかからあげられた事実もありました。

なお実践活動のなかより

①自治会活動展開と趣味活動を中心とした小G活動の必要性。

②集団の力量を的確に分析し、それに即応する援助内容の必要性を体験的に学びました。

以上のことを念頭によりよいG活動の展開を、以後も継続的に検討していきたいと思えます。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<はじめに>

入所患者の生活は、身体的にも、環境的にも制限を受けやすい要因を含んでおります。しかし 20 才以降の年代は、社会に参加し自己の環境を設定していく主体的年代であります。患者に即応する環境づくりをめざして自治会活動を展開しており、そこへ提起された作品展活動を媒介として